

の練習をやつてをるのが聞える。

家を出たのが七時半。今日は縣社の祭なので、竹や旗でかざられ町中が賑やかだ、新しい紺の香のする、法被を着た職人風の人々が、高い聲で話をしながら、城跡の方へ行くのに會つた、大方花見でもするのだらう。

大手御門の前で二三人の一年生に合つた新しい白い條を一本つけた帽子を取つて丁寧な禮をしてサツ／＼と過ぎ去つた、あわてゝ答禮をした、もうおれは二年生になつたのだといふ感が、サツと頭の中を通つて何んとなく誇らしい氣持がした。

控所はやつぱり賑やかだエーイビーシーといふ一年生の聲新しい教科書の香新學期の氣分が、こゝにも漂つてをる。

五時間の授業を終へて暖い西日を脊にうけながら歸るとゴーンゴーンと二點鐘が春の空にしみる様に餘音を残して響く、小學校の角で一年生に道を聞かれドキマギしてうまく口がきかれなかつた。それでも彼は禮を言つてかけて行つた。後で獨りでをかしくなつて歩みながら笑つた。

下宿に歸つて服を洗つたのか、二時半頃、
○君は一人で机で何か書いてををつた。

夕焼した空を仰ぎながら散歩する宇多の清い流はサラ／＼と春にふさはしくない淋しい感じをさせる故郷の事などを考へてをる内自然と足は下宿の方にむいた。頭を上げるといつのまにかぼんやりした月が東に出てををつた。

手紙をかく。手を措くと○君の安らかな、いびきが聞える。外は非常に静だ。とこかの時計が、チンチン……と九つうつた。月が雲から出たのかボンヤリ障子が明るくなつた。

運動會

二 乙 鈴木 安 藏

九月廿五日、夜來の雨は名残なく晴れて、高き天には、一片の雲影さへなかつた。眞の運動日和である。四年生の苦心に依つて成つた、運動場の入口にたてられた大緑門は、唇寒き秋風を眞面に受け、尙武の二字を額に飾り、巍々然として聳えてをる。東

の丘に昇つて、場内を一望すると遠い西の觀覽席に今年新しく工夫した大時計が、その兩針を動かして「時は金なり」の教を告げてをる。中央の高く天を摩する旗竿を中心として、東西南北前後左右、蜘蛛の巣のやうにはられた萬國々旗や招待人席の紅白の幔幕は皆、各々運動會の氣分を遺憾なく、漂はしてをる。見物人席は、何時の間にか立錐の餘地もなくみたされた。やがて燃えるやうな紅の校旗は、武装せる三、四、五年の生徒に護衛せられて、堂々と式場にやつて來た。開會の辭が終ると二、三發、勇ましく空高く白い煙をのこして煙火が上つた。もう時刻が來たのだ。

大時計が十時を示してをる時、痛快な競技の幕は打ちきられた。プログラムは順次進んで二週競争二年一組の所まで來た、僕等二十餘名は胸を躍らしつゝ、白い出發ラインの前に四十幾つの足さきを揃へた。「用意」……ドーン!! 一瞬間、僕は夢中で走り出した。足は思ふやうに進まない、胸は次第に苦しくなつて來た。「しつかり、遅いぞ」人々の叫ぶ聲が辛うじて聞きとれる程である、一周は終つた、やうやく

トに金ぶちで、葉まきを口にした所謂セントルマンもすまじきつてをる、片肌ぬいだ漁村の兄さんもある、辯護士、坊さん、按摩、購買ひ、車や、お角力さん、お百姓、乞食、果ては、たつてあるくいざり等……、世の中のあらゆる職業を皆あつめたやうなものだ。

一先づ此の騒が静まつた頃、小學校の選手の優勝旗争奪戦は開始された。記すまでもなく、今日の花であつた。人々の熱狂はその極に達した、併し意外にも、その結果は常勝軍であつた松ヶ江選手敗れ、新地選手利あらず、尋常校の優勝旗は遂に磯部校に歸し、高等校の優勝旗は、〇〇校の得るところとなつた。敗れて、しほくと引き退く選手、優勝して嬉々満面に笑をうかへて、引きあぐる選手、その心の中には、皆各々特別なある感じにみち／＼てをるだらう。

かくして運動會は、その他種々の競技、遊戯に吾々をよろこばせ、胸をわかして、定刻四時にいたつて全く了つた。新學期以來待ちに待つて居た此の運動會も、天の助けを得、人の和を得て成功に終り

第二周目だ、足は益々重い。自分を追ひこす人の顔がおぼろにみえる、口から火を吐きながら、スピードを出して走つたが矢張り駄目だつた、音楽堂の邊に來ると、決勝をせしめる號砲が、高く耳朶をつんざいた。どつと喊聲がつゞく、後をみると八九人しかなくつた、僕等が二年の控所に戻つた時は次の組の競技がもうはじまつて居た。チリン／＼、號外潮光社の小さい配達が通りすぎさま一枚の號外をほうり出して行つた。巧みなスケッチに人々をよろこばしてをる。次の自分等の競技までは未だ充分時間があるので、後の堤に上つて木蔭に暑い日光の放射をさけた、涼しい風が汗にまみれた、運動後の身体を涼しく吹きとほしてくれた。

正午もすぎで、漸く一時を示した頃、渴望してをつた辨當が開かれた。いつになくおいしい。隣りのK君も御馳走があるので、大満足で食つてをる。「チリン／＼、動員行列將に來らんとす」なんだか敵軍でも、來襲したやうな騒ぎだ、今日第一の呼物、餘興の假裝行列が來るのである。天秤かついだ元氣のよい若衆もをる、シルクハット

を告げた。

夕陽漸く西山に春き、黒い浮雲が、鹿狼の峯の如くなたに、二つ三つ浮んで日はくれやうとしてをる。家路に急ぐ若い健兒の胸は、皆愉快といふ氣にみちて、眞に運動の面白みを解き得たのである。(終)

冬の朝

一 甲 松 本 匂

舎監室の時計が四時を打つた。あたりはしんとして時々隣室の十一室より鼾がかすかに聞えるばかり、そろ／＼火をもらいに行かうと思つて暖かい寢床を思ひ切つて起きた。静かに窓を開くと夜目にははつきり分らぬが確かに大霜だ。また東の空は雀色である。七日の残月は皎々として下界を照して居る。故郷の空にも此の月が照つて居るかと思ふと一層故郷がなつかしくなる。床を疊んで炊夫のところへ火をもらひに行くとまだ誰も來て居ない。「占めた」と誇り顔して居ると後から皆がぞろ／＼續いて來た。火をもらつて水をわかつて掃除をする。十五分も雜